『國民新報』1939年4月30日

死しての後のほまれ[[1]](#footnote-1)　　―靖国神社招魂式

四月二十三日からので、これには今度の事變で國に殉じた一萬三百八十九柱のを、の神々としてめまゐらせるがとなつて居る

二十三日には招魂式があり、二十五日にはくも、にあらせられ、そのたる午後十時十五分をして一にをげたのである。

にられてるのには、のにした半島出身[者]もあるのだが、また、朝鮮總督府巡査、じくのがこのをふこととなつた。金子元氏の令弟は『靖國神社に祀られることそれだけで滿足です。私どものの心は内地の人に決してりませぬ』と述べたさうであるが、にもしいことである。

『で逢はう』

とはすると、それをるとののである。生きてはらぬをすことだが、にをたことをぶにもなるのである。ものためにすることによつて、も願ふものはない。ただにんでのとなることそれだけなのだ。のがつた『にられること、それだけでです』――これなのだ。

朝鮮人もこれから、どしどしにられなければならない。朝鮮のたるもの正にをその魂のとべきである。朝鮮にもたる京城ととにをてることになつた。これは實に朝鮮男児の[[2]](#footnote-2)たるべきである。

朝鮮人は元々いではなかつた。はやのをした。や安城市の大勝利がこれなのだ。にあり、新羅にあり、はれものためには、を見ることのごとくであつた。

かかるのは今日といへども朝鮮人のに流れてゐるのである。

今や朝鮮民族の進む道は一にして一あるのみだ。それはきては皇國のためにのとなり、死しては日本のためにの神となることである。にやをることなくしてを靖國神社やにあづかつてくことである。かくしてこそ、のを繼ぐことともなり、のをることともなるのである。

1. 単行本『同胞に寄す』では「の」を取って「死して後のほまれ」とされている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 単行本『同胞に寄す』では「誇」が「廟」に代わっている。 [↑](#footnote-ref-2)